

プログラムノート

ラフマニノフ:チェロソナタ Op.9

セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)は、ロシア後期ロマン派を代表する作曲家・ピアニストです。1897年に交響曲第1番が酷評され、深刻なスランプに陥ったラフマニノフは、催眠療法などを経て1901年にピアノ協奏曲第2番を完成し、作曲家として復活を果たします。“チェロ・ソナタ”はその翌年、1901年から1902年にかけて作曲された作品で、ラフマニノフが精神的に再生し、創作力を取り戻したことを示す大作です。

このソナタは彼の唯一のチェロとピアノのための大規模な作品で、演奏時間は35分前後と、ロマン派ソナタの中でも堂々たる規模を誇り、ブラームスやショスタコーヴィチのチェロ・ソナタと並び称される傑作であり、チェロの深い歌心とピアノの壮麗な響きが融合した、豊かなドラマを展開します。

特筆すべきは、チェロとピアノの関係です。標題は“チェロ・ソナタ”ですが、実際にはピアノが極めて重要な役割を担い、両者が対等に対話する形式を取っています。奏者の間ではしばしば“チェロ伴奏つきのピアノコンチェルト”と冗談で語られます。

参考文献: 特記のあるもの以外は、Wikipediaを参照した。

プロフィール

ピーティ田代櫻【チェロ】 PEATEY TASHIRO Sakura



日本生まれ、父はオーストラリア人。6歳から鈴木メソッドにてチェロをはじめ、桐朋学園付属子供のための音楽教室に通う。桐朋学園高等学校音楽科卒業後、アメリカの南メソジスト大学(SMU)に特待生として留学、帰国後東京音楽大学及び同大学院修士終了。同大学博士後期課程では給費奨学生としてデュポールの研究をし、2017年の日本表現学会ではヴィブラートについて発表を行った。2018年3月音楽博士学位(DMA)を取得。2003年第4回大阪国際音楽コンクール第2位。06年ドイツクロンベルグ・チェロフェスティバル最優秀生徒によるガラコンサートに最年少で出演。第27回市川新人演奏家オーディション最優秀賞。首席チェロ奏者として11、12年東京音楽大学オーケストラ、及び13、15年音楽大学フェスティバル・オーケストラの各公演に出演。今までに、佐藤明氏、安田謙一郎氏、Andres Diaz氏、毛利伯郎氏、ドミトリー・フェイギン氏に師事。現在は、ソロ、室内楽、オーケストラ、レコーディング、チェロアンサンブルなど、幅広く活動。室内楽では、日フィルソロコンサートマスターの木野雅之氏率いるシェルム弦楽四重奏団メンバーとして、日本財団の援助により、2015年からインドネシアやマレーシアの各地で演奏会やマスタークラスなどに携わる。また、パナマやマレーシアなど海外の大学に招かれ、マスタークラスやリサイタルなど数多く行なっている。湘南チェロスタジオ主宰。

<https://sakura-cellist.com/menu>



坂本里沙子【ピアノ】 SAKAMOTO Risako

大磯町出身。桐朋女子高等学校音楽科を経て、2012年よりロシア国立モスクワ音楽院に留学。在学中、スクリャービン国際コンクール第2位(フランス)、リガ国際コンクール第1位(ラトビア)など、複数のコンクールで入賞を果たす。2019年に同音楽院を卒業し、ロシア国家演奏家資格を取得。現在はソロやアンサンブルでの演奏活動を行うほか、ピティナ・ピアノコンペティションや日本クラシック音楽コンクールにおいて審査員を務めるなど、後進の指導にも力を注いでいる。著書に『私の音楽留学』(群像社)。現在、早稲田大学大学院にて19世紀ロシア音楽雑誌『ヌーヴェリスト』の研究を進めている。

<https://risakosakamoto.com>



Rzp LLC主催 次回演奏会
2026.4.12(日)
森麻季・錦織健デュオリサイタル
小田原三の丸ホール大ホール
チケット発売中

ピーティ田代櫻 チェロ・リサイタル

“ドイツの光 と ロシアの風”

2026年2月11日(水・祝)

開演: 14:00

小田原三の丸ホール小ホール

ごあいさつ

ピーティ田代櫻チェロ・リサイタルにお越しいただき、ありがとうございます。
本日のプログラムは、20世紀のストラヴィンスキーが18世紀のイタリア音楽を素材にしたイタリア組曲、次にベートーヴェン、最後にロシアのラフマニノフと時代と国境をまたがる壮大なプログラムです。聴き終わって、ピーティさんが付けた副題“ドイツの光とロシアの風”の意味がわかるようになったら、幸いです。最後までお楽しみください。

Rzp LLC 代表 磯部波男

プログラム

チェロ：ピーティ田代櫻
ピアノ：坂本 里沙子

ストラヴィンスキー：イタリア組曲(19分)

- 1 序奏
- 2 セレナータ
- 3 アリア
- 4 タランテラ
- 5 メヌエットとフィナーレ



ベートーヴェン：チェロソナタ第3番 Op.69(27分)

- 第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント
第2楽章 スケルツォ：アレグロ・モルト
第3楽章 アダージョ・カンタービレ
-アレグロ・ヴィヴァーチェ

ラフマニノフ：チェロソナタ Op.19(37分)

- 第1楽章 レント-アレグロ・モデラート
第2楽章 アレグロ・スケルツァンド
第3楽章 アンダンテ
第4楽章 アレグロ・モツソ

プログラムノート

ストラヴィンスキー：イタリア組曲

バレエ音楽「春の祭典」(1913)は20世紀初頭の音楽に革命をもたらしたストラヴィンスキーの代表作ですが、ロシアバレエ団の主宰ディアギレフは次の作品として、ペルゴレージ等の音楽による、プルチネッラを主人公としたバレエを作るよう、ストラヴィンスキーに依頼しました。作曲は1920年にかけて行われ、素材のペルゴレージ等の音楽が18世紀イタリアのものなので、新古典主義と呼ばれますが、ストラヴィンスキーは原曲には手を入れず、新たに加えた部分はロシア的な特徴が強くなっています。

イタリア組曲は、このプルチネッラから5曲を選び出し、チェリストのピアティゴルスキーと共同で(チェロとピアノのための)イタリア組曲として1932年に編曲されたものです。(ヴァイオリンとピアノのためのイタリア組曲もあります)

セレナータやアリアの優美さ、タランテラやフィナーレの機知に富んだ舞曲性など、チェロとピアノの掛け合いが洒落な魅力を放ちます。

ベートーヴェン：チェロソナタ第3番Op.69

「傑作の森」と称されるベートーヴェン中期の傑作群のうち、交響曲第5番「運命」Op.67と交響曲第6番「田園」Op.68は世界遺産といってもよい大傑作です。

その次のOp.69は、5曲あるベートーヴェンのチェロソナタの真ん中に位置する第3番で、ピアノが担っている役割が多かった初期の1、2番に対し、チェロらしい響きの扱いがさらに増えたこれも大傑作です。

(4、5番になると大変複雑な精神世界を垣間見ることができます。そのため、バッハの無伴奏チェロ組曲が旧約聖書と呼ばれるのに対し、ベートーヴェンの5曲は新約聖書に例えられています)チェロは人の声と同様、レガートといって音を連続して奏でることが出来、且つ人の声と同じ高さなので、限りなく温かみのある楽器です。ソナタを受け持つピアノとの、丁々発止の演奏をお楽しみください。
(磯部・ピーティ田代櫻 記)